

多様な市民がミュージアムに参加・参画できる環境をつくるために

経営管理グループ 横田 誓子

概要

当館では、2024年度に実施した展示の一部リニューアル（第1期）において、展示更新ビジョンを「自由に楽しみ、『面白そう』があふれる広場」と決めました。このビジョンのもと、具体的な指標として5つの視点（※）を設け、その1つに、「社会的包摂（ソーシャルインクルージョン）に基づく共創の場」を掲げています。これは、社会を構成する多様な人々に対し、科学館を利用しにくい要因を低減すること、またユニバーサルデザインやアクセシビリティを考慮するとともに地域コミュニティとの連携に取り組むことを、今後の館の重点テーマの一つとしたことを意味しています。これに伴い、私たちはミュージアムにおける「社会的包摂」を進めるため、館の内外において、地域社会の多様な人々とつながる取り組みを開始しました。さまざまな背景をもつ市民が科学館の事業に参加・参画できる環境をどのように作っていくのか。市内関係団体との連携や職員研修など、2024年度の取り組みを報告します。

※5つの視点

- ①プロセスを重視した探求・創造・交流の場
- ②社会的包摂（ソーシャルインクルージョン）に基づく共創の場
- ③学びと楽しみ（エンジョイメント）の融合による愛着・長期的記憶の形成の場
- ④文化のゆたかさにふれる場
- ⑤フィジカル空間 / サイバー空間ともに開かれた場

資料：2023年度紀要「職員主体で行う展示リニューアル～浜松科学館 展示リニューアル 2024/2026 基本計画策定～」

1. 背景

近年、社会状況の急激な変化に伴い、ミュージアムの社会的役割も多様化しています。2022年に約70年ぶりに改正された博物館法（2023年4月1日施行）においても、資料収集・保存、調査研究、展示、教育普及といった社会教育・生涯学習の場としての基本的な機能だけでなく、観光、国際交流、福祉や産業への寄与、地域振興、地域課題への対応など、新たな役割が期待されています。（※1）

こうしたミュージアムを取り巻くさまざまな変化を受け、当館でも2024年度の第1期展示一部リニューアル（第2期は2026年度）において、「社会的包摂」を重要な視点の1つとして掲げ、その取り組みを開始しました。今回は、関係団体の協力を得て実施した取り組みについて報告するとともに、当館のDE&Iポリシーの策定や今後の課題について報告します。

（2024年度の主な取り組み）

年月	おもな取組	関係団体
2023.2	インクルーシブデザイン講座	NPO 法人 Collable
2024.5	日本語教室開室	（公財）浜松国際交流協会
2024.5 2024.6	インクルーシブデザインワークショップ	NPO 法人 Collable
2024.7	外国人学校への出張プログラム	ムンド・デ・アレグリア学校
2024.7	視覚障害者支援施設ウイズ六星見学・視察	NPO 法人 ウイズ六星
2024.9	凸凹まつり参加 ワークショップ出展 ※有志参加	特定非営利法人 クリエイティブサポートレッツ
2024.9	特別支援学校への出張プログラム	浜松特別支援学校磐田分校

2024.10	※登録博物館として 認定	文化庁
2024.10 ～2025.2	ミュージアム・アク セシビリティ講座 「ふかふかTV」受講 ※希望者	国立アート リサーチセ ンター
2024.12	利用者支援研修（視 覚障害	NPO 法人 ウイズ六星
2025.1	認知症サポーター養 成講座	浜松市 高齢者福祉課
2025.3	DE & I ポリシーの 策定	

2. 取り組み

①インクルーシブデザインの実践

NPO 法人 Collable（※2）の山田小百合氏を講師に迎え、事前レクチャーとワークショップを実施しました。徳島県立博物館での実践を参考に、科学館の利用や滞在、体験において「誰もが気軽に訪れたり利用したりできる環境のために何ができるのか？」を、4人のリードユーザー※（車いすユーザー、視覚障害、聴覚障害のある方、外国籍の方）とともに、ハード・ソフト両面から検討しました。

リードユーザーの皆さんは、今回のワークショップだけではなく、引き続き科学館のパートナーとして助言をいただくなど、ご協力いただいています。

当館のワークショップ実践については、NPO 法人 Collable さんが、Note ※にまとめてくださっていますので、ご参照ください。

※リードユーザー

リードユーザーとは、インクルーシブデザインにおいて、場に新たな気づきを与える役割の人を指す。障害のある人、外国籍の人など、従来の製品やデザインでは対象とされにくい人がこの役割を担う。

※ Note 【実績】科学館をもっと自由に！展示リニューアルをきっかけに、浜松科学館が全職員で挑んだインクルーシブデザイン実践（2024）

<https://note.com/collable/n/nea0fce8324b5>

○事前レクチャー「浜松科学館のリードユーザーを考える」

講 師：山田小百合氏（NPO 法人 Collable）

開催日：2024年2月13日（火）

会 場：浜松科学館

参加者：浜松科学館 常勤・非常勤職員

計 約 40 名

内 容：山田氏による「インクルーシブデザイン」の概要についての講義と、グループに分かれて、「浜松科学館から遠い人」を考えるワークショップを実施。

○インクルーシブデザインワークショップ

ファシリテーター：山田小百合氏（NPO 法人 Collable）

開催日：Day 1 5月27日（月）

Day 2 6月17日（月）

会 場：浜松科学館

参加者：浜松科学館 常勤・非常勤職員、

リードユーザー（4名）

浜松市所管課職員

計 約 50 名

目 的：浜松科学館展示リニューアル第一期において、浜松市在住の多様なユーザーの参加協力のもと、「インクルーシブデザイン」を活用し、ユーザーインサイト調査を行うとともに、プロジェクト関係者である職員がインクルーシブデザイン手法を体験的に学ぶ機会とする。



図 1：会場の様子



図2：リードユーザーとプロトタイプ制作

②(公財)浜松国際交流協会(※3)との連携

浜松国際交流協会とは、2022年12月に職員を対象とした「やさしい日本語講座」を開催し、以降、科学館職員が浜松国際交流協会主催の日本語ボランティア講座などに参加するなど、多文化共生に関する知見を深めてきました。2024年5月には、浜松国際交流協会が主催する日本語教室が、浜松科学館を会場として開講し、協力関係を築いています。対象は、外国人学校の生徒および公立小・中学校に通う外国にルーツをもつ児童生徒で、科学館は会場提供をするとともに、教室に通う子どもたちを対象に、夏季・冬季にイベントを実施することで、日本語学習と科学の学びを融合させた取り組みを展開しています。

詳細は、本紀要の「日本語教室との協働」をご参照ください。



図3：日本語教室の様子

③外国人学校との連携

浜松市には外国人学校が3校あります。今回訪問したムンド・デ・アレグリア学校は、園児～高校生約200人(ペルー、ブラジル国籍)が通う学校で、母国政府の認定を受けたカリキュラムに沿って、母語で学んでいます。(※4)私たちは今回、初めて学校を見学させていただき、コーディネーターや日本語指導課の日

本人教師や理科担当の外国人教師から、子どもたちの生活や理科学習の様子をうかがうことができました。コーディネーターの方から、外国人学校の生徒たちは、日頃、学校と家庭を行き来するだけのことが多く、日本人との交流が少ないことや、母語だけでなく日本語の学習も大切にしたい、との要望を受け、生徒たちの母語と日本語の両方を意識した科学の学びの促進を図りました。中学1年生から3年生の理科の時間を利用して、科学館エドゥケーターが「電気」をテーマに授業を実施しました。

○出張プログラム

日時：6月21日(金)

学校名：ムンド・デ・アレグリア学校

学年：7年生(中学1年生)19人

8年生(中学2年生)17人

9年生(中学3年生)18人

担当：チーフエドゥケーター(上野)

内容：8年生で学ぶ「電気」をテーマに

いくつかの実験を行う。

(各回40分)

備考：当日資料の表記について

資料(PPT)は、当初ひらがな表記で作成したが、学校側で検討し、漢字にルビ、理科で使用する学習用語(例：並列回路、直列回路)は母語(ポルトガル語)を併記することとした。

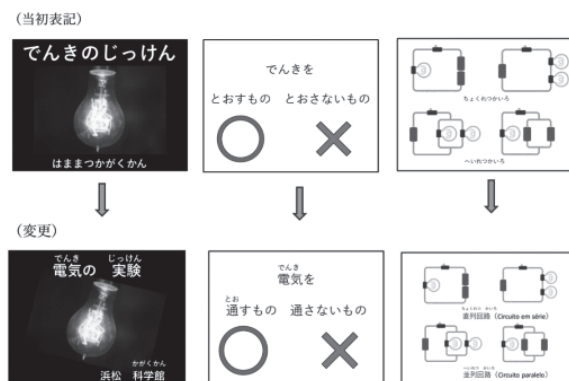


図4：資料の修正



図5：当日の授業の様子

同校との交流は、出張プログラム以降も続き、9月には高校生4名が二日間、科学館での職場体験に参加し、科学館の仕事を体験しました。また、11月には「やさしい日本語案内」を作成した科学館ジュニアボランティアが、冊子の検証を兼ねて、同校生徒4名を招待し、交流会を開催するなど、相互理解と協働学習の機会を創出しました。

④特定非営利活動法人「クリエイティブサポートレッツ」との協働

福祉とアートを融合させた活動を行う「クリエイティブサポートレッツ」(※5)とは、2024年2月以降、レッツが主催する「凸凹(でこぼこ)まつり」実行委員会への参加を通じて関係を築くとともに、地域における「新しいコミュニティ」づくりや、包摂的な文化イベント運営のあり方を考える機会をいただきました。9月には、凸凹まつりに科学館職員が有志で参加し、ワークショップやブース出展をしました。来場者とともに工作やシャボン玉づくりを楽しむ体験活動を通して、障害の有無にかかわらず、多様な人が交わる場づくりについて、大きな学びと気づきを得ることができました。



図6：凸凹まつり シャボン玉ブース

また、凸凹まつりに参加した筆者が、開催したワークショップで感じたことを、文化庁の広報誌「ぶんかる」に寄稿しています。

「専門性と多様性が交わる場所をめざして——「外」で生まれた小さな問い」

https://www.bunka.go.jp/prmagazine/rensai/museum/museum_094.html

⑤アクセシビリティに関する職員研修

職員に対する学びの機会も積極的に確保しています。博物館関連シンポジウムや国立アトリサーチセンターのアクセシビリティ研修(eラーニング)、地域の日本語教育に関する研修、認知症サポーター養成講座などへの参加を通じ、社会包摂に関する最新動向を学んでいます。

また、市内視覚障害者支援施設ウイズ六星(※6)が運営する「ウイズ蛭塚」「ウイズ半田」「ウイズかじまち」などでの施設見学(7月)をはじめ、利用者支援研修(視覚障害：12月)の講師を依頼するなど、地域の福祉実践者との連携を深めるとともに、浜松特別支援学校磐田分校での出張プログラム実施(9月)や、静岡文化芸術大学のユニバーサルデザイン研究フィールドワークへの協力(8月)など、教育・研究・福祉の各分野を横断した連携も展開しています。



図7：利用者支援研修(視覚障害)



図8：認知症サポーター養成講座



図9：静岡文化芸術大学 UD デザイン研究 FW

3.DE&I ポリシーの策定

2024年度の社会的包摂(ソーシャルインクルージョン)に関する取り組みを経て、当館では DE&I ポリシーを策定し、展示更新事業で掲げたビジョンや5つの指針と連動する5つの行動指針を定めました。以下、前文を掲載します。

【浜松科学館 DE&I ポリシー】

「浜松科学館は、あらゆる人に開かれ、安心して集い、つながり、遊び、学び合う広場をつくることを目指します。」

浜松科学館は、多様な文化交流を通して人々がつながり、地域への誇りと愛着をもとに、創造都市に貢献することを目指しています。社会環境が急速に変化し、価値観の多様化が進む現代において、多様な市民がもつ創造性を科学の視点で地域づくりにいかす、幅広い取組の拠点としての役割を果たします。

私たちは、持続可能な共生社会を構築するために、性別、人種、宗教、年齢、障害、性的指向、経験、価値観に関係なく、多様な声に耳を傾けるとともに、以下の行動指針をもとに、「Diversity, Equity & Inclusion(DE&I)」を推進します。

(行動指針)

○誰もが公平にアクセスできるように、物理的な環境の整備やサポートを行うとともに、対話を通じた調整、変更を柔軟に行います(アクセシビリティ)

○誰もが自分の選んだやり方で学ぶことができるように、多様な学びの入り口を設けます。(多様な選択肢)

○誰もが自由に参加し関わることで、互いの違いを認め合える、地域に開かれたインクルーシブな場をつくります。(包摂・共生)

○誰もが危険にさらされることなく、安心して過ごせるように、安全な環境づくりに努めます。(安心・安全)

○誰もが楽しみながら自分の世界や可能性を広げられるよう、ワクワクするような学びを提供します。(エンジョイメント)

3. おわりに

すべて人は、自由に社会の文化生活に参加し、芸術を鑑賞し、及び科学の進歩とその恩恵にあずかる権利を有する。

すべて人は、その創作した科学的、文学的又は美術的作品から生ずる精神的及び物質的利益を保護される権利を有する。

これは、世界人権宣言(※7)の第27条に書かれている文言です。

谷川俊太郎とアムネスティ日本が、やさしい言葉でも紹介しています。

第27条 楽しい暮らし

だれにでも、絵や文学や音楽を楽しみ、科学の進歩とその恵みをわかちあう権利があります。また人は、自分の作ったものが生み出す利益を受ける権利があります。

恥ずかしながら、文化を享受し、暮らしを豊かにすることは、誰もが生まれながらにもつ「権利」なのだ。知ったのは、今年度、DE&Iの取り組みを始めてからでした。

2024年4月には、すべての事業者に「合理的配慮の提供」(※8)が義務化されました。もちろんミュージアムも例外ではありません。とにかく、勉強しなければ知らないことが山ほどありました。

ミュージアムとは「資料を集めて保管し、調査研究して資料の価値を調べ、その成果を展示やいろいろな方法で発信し、すべての人々に学びや楽しみを提供する機関」(文化庁※1)であり、だれもがその資源を利用し、楽しむことができるように整えていかなければいけません。私たちは日頃、ミュージアムを楽しむことと人権を結びつけて考えることは、ほとんどありません。しかし、今回、インクルーシブデザインワークショップでリードユーザーについて考えることから始まり、外国人市民や視覚障害者、認知症の方など、いわゆるミュージアムから遠い人を考える機会をもったことで、誰もが生まれながらに持つ「権利」を守らなければいけないことを、ミュージアムから遠い人たちが誰もがミュージアムという文化資源にアクセスできるように、情報保障と情報アクセシビリティを整えていかなければいけないことを学びました。

浜松科学館は2024年10月に登録博物館(※9)の認定を受けました。登録博物館として、ひらかれた施設であり続けるために、私たちは常にここから遠くにいる人たちを考えて、運営していくことが求められます。2024年度の取り組みは、まさにそのスタートだったと感じています。DE & Iポリシーを定めたとはいえ、館内職員にも周知されていない状況であり、まだまだ行き当たりばったりの取り組みであることは否めませんが、ここから遠くにいる人たちと関わりを持つ人たちと協働することで学び、考え、実践することを繰り返しながら、多様な市民が安心して参加・参画できる環境づくりを進めていきたいと思えます。

(※参考資料)

1 文化庁：博物館総合サイト

<https://museum.bunka.go.jp/museum/>

2 NPO 法人 CollableHP

ためにか、ともにへ <https://collable.org/>

3 (公財) 浜松国際交流協会 HP

はままつ多文化共生・国際交流ポータルサ

イト <https://www.hi-hice.jp/ja/>

4 ムンド・デ・アレグリア学校 HP

学校紹介

<https://www.mundodealegria.org/schoolintroduction/>

5 特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ HP

「あたりまえ」から「あるがまま」へ

<https://cslets.net/wp/project/intoduction>

6 NPO 法人六星 ウイズ半田・蜷塚・かじまち

<https://np06seiwith.sakura.ne.jp/>

7 世界人権宣言 (国際連合広報センター)

https://www.unic.or.jp/activities/humanrights/document/bill_of_rights/universal_declaration/

アムネスティインターナショナル

「わかりやすい世界人権宣言」(谷川俊太郎訳)

https://www.amnesty.or.jp/lp/udhr/?gad_source=1&gad_campaignid=1628848734&gbraid=0AAAAADmUG4QC_CILyALINw6vpiY6514f5&gclid=Cj0KCQjw9obIBhCAARIsAGHm1mQBixHimJLGyuYp17CdMFMpZRmTwnTU1kHa0dUCXJHVG_f_1Hbp9ZAaAoStEALw_wcB

8 合理的配慮の提供

(内閣府)

<https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai-leaflet-r05.html>

(国立アトリサーチセンター)

https://ncar.artmuseums.go.jp/upload/deaihandbook2024_web.pdf

9 博物館登録制度について (文化庁資料)

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/hakubutsukan/hakubutsukan01/05/pdf/92826001_01.pdf